

汽船の中の父と子

小川未明

青空文庫

ふる 古い、小形の汽船に乗って、海の上をどこということなく、東
 に、西に、さすらいながら、珍しい石や、貝がらなどを探してい
 た父子の二人がありました。

あるときは、北の寒いところで、名もない小さな島に上がって、
 珍しい青い石を探したこともあります。また、あるときは、南の
 熱い太陽の赤々と照らす、真下のところで、赤い石を掘った
 こともありました。

二人は、珍しいものが手にはいると、いろいろな国の都へ、ど
 ことはかぎらずに、船の便宜によつて上陸しました。そして、
 にぎやかな街の中を歩いて、それを貴族に売ったり、金持ちに莫

くだい 大な金で売りつけたり、また商人に譲つたりしたのであります。

父と子といつても、すべて、父親一人の力でありました。男の子は、まだ、それほど年がいなくて、ただ、父親のゆくところへは、どこへでもついて歩いてゆくばかりであつたからです。父親は、氣むずかしい顔をして、髪をのばしていました。青い月の光が、水のように美しく、華やかな、にぎやかな街のかわら屋根に流れる夜、その街を歩いて、その日は、珍しい石を高く売りつけたので、とある酒場にはいつて、たくさんごちそうを食べたりしたこともあります。そんなとき、子供は、その店で鳴らしている楽器の音を、どんなにか悲しく思つたではありません。

また、美しい女らの顔や、唇や、そして、白い歯を光らしながら歌った、その土地土地の古い唄をどんなになつかしく思ったでありました。

しかし、そこにいるのも、けっして、長い間ではありませんでした。二人は、また、小さな汽船に帰らなければならなかったからです。

汽船は、二人が陸に上がっていない間は、じつと海の上に、真つ黒な顔をして待っていました。長い間、雨や、風に、さらされたので、汽船がそう汚れて、くろっぽく見えることには、不思議がありませんでした。

「おればかりは、いつも海しか、見ることができないのだ。陸へ

上がつて、にぎやかな、街を見ることも永久にかなわないのか……。」と、汽船は、不平そうな顔つきをして、いつているようでありました。

父親は、取引がすむと、重そうに金を抱いて、船の中に、子供をつれて帰つてきました。そして、それを金箱の中に、大事にしてしまいました。その箱はがんこに、真つ黒な鉄で造られていました。

父親が、金貨や、銀貨が、だんだん航海するたびにたまつてくるのを、うれしそうにながめながら、

「この金貨は、西の国の金貨だ。この金貨は、東の国の金貨だ。この銀貨は、重い。しかしこちらの銀貨のほうは、もつと目方が

ある。」といつていますのを、子供は、そばで、ただ黙つたまま
見ていました。

「お父さん、そんなに、金貨や、銀貨を、たくさんためて、どう
するんですか？」と、子供は父親に向かつてききました。

「おまえ、街へいってみれ、おもしろいことがたくさんある。き
れいなものが、ありあまるほどある。これんばかりの金なんの
役にたつものか。もつと、もつと、金をためなければならぬ。」
と答えました。

子供は、もはや、海の上の航海に飽いていました。なぜなら、
青い波と青い空のほかには、なにも見ることができなかつたから
です。そして、暴風の日は、小さな汽船が、木の葉のように、

波の間にひるがえり、灰色の、ものすごい雲が、あたりを包んで、まったく、生きてゐる心地がなかつたからであります。

しかし、父親はまだ航海をやめようとはしませんでした。

ある日のこと、二人は、知らぬ港に船を着けました。そこには、諸国の人々が集まっています、珍しい話をしたり、また類のまれな品物などを出し合ったりしてながめていました。なかには、自分の持っている品を、ほかの人の持っている品と交換したりするものもあつたのです。

二人は、この港に上がつて、ぶらぶらと歩いていました。すると、白いひげをはやしたおじいさんが、石に腰をかけて、銀製のオルゴールを持って、前を通る人をぼんやりとながめていまし

た。

父親ちちおやは、オルゴールに目めをつけて、おじいさんの前まえにやつてきました。そして、どんな音おとがするのかとたずねたのでした。

おじいさんは、父親ちちおやの顔かおを見みながら、

「私わたしは、このオルゴールを、ここから遠とおい、西にしの国くにの村むらの古道具ふるどう屋ぐやで見みつけました。じつに、不思議ふしぎな音おとがするので、いままで、多おほくの人々ひとびとに譲ゆずってくれと頼たのまれましたけれど、手放てばなさなかつた品しなです。」と答こたえました。

「どれ、ひとつ、その音おとをきかせてもらえまいか。長ながい間あいだ、海うみの上うえに暮くらしているのです、しばらく、いい楽が器つきの音ねいろ色いろをきいたことがないから……。」と、父ちちおや親おやはいいました。

おじいさんは、オルゴールを鳴らしはじめました。すると、父親は、耳を傾けていました。

なんとというさびしい、その中にも、明るい感じのする音色でしょう。波の音のような、鳥の鳴く声のような、また風の狂う響きのような、さまざまな音のする間に、いろいろなことが空想されるのでした。

父親は、赤いさんごを採った、南の小さな島を思い出しました。また、青い石を掘った、北の寒い島の景色を思い出しました。また、暴風の日のことなどを思い出しました。かぎりない、海上の生活を、つきからつきへと、記憶に呼び起こしたのであります。

「このオルゴールは、海の唄^{うた}でもいうのかな？」と、父親^{ちちおや}は感心^{かんしん}して、たずねました。

おじいさんは、笑^{わら}って、

「いや、鳥^{とり}の唄^{うた}だと、いったものがあります。」と答^{こた}えたのでした。

「鳥^{とり}の唄^{うた}？ なんとという鳥^{とり}であろう。」

父親^{ちちおや}は、どうしても、その鳥^{とり}を思^{おも}い出^だすことができなませんでした。

「なんにしても、まあ、いい。どうか、このオルゴールを譲^{ゆず}ってもらいたいものだ。」といつて、おじいさんに、頼^{たの}みました。

「私^{わたし}は、子供^{こども}の時分^{じぶん}から、故郷^{こきよう}を出^でて流浪^{るろう}しています。このご

ろは、このオルゴールをいい値で買う人を見つけて、もし売れたら、故郷へ帰りたいたいと思つています。」といいました。

子供は、おじいさんのいうことを聞いて、同情しました。自分が、つねに、美しい草花や、ちようや、野原に憧れている心持ちを、よく知つていたからであります。

父親は、いくらかの金を出して、そのオルゴールを買いました。しかし、その金は、おじいさんを満足させなかつたようです。

「おまえさんは、たくさんお金を持つていなさるようだが、もつと私にくれてもいいの。」と、おじいさんがいつたからです。

しかし、父親は、オルゴールを持つと、さつさと、あちらへ

いってしまいました。

このとき、白いひげのおじいさんは、石から起き上がって、二人の後ろ姿を見送っていましたが、ふと、思いついて、ポケットにいれてあった鍵をつかみ出すと、父親が忘れていったと知ったので、おじいさんは、すぐに二人の後を追いかけたのです。けれど、二人は、どこへいったものか、おじいさんは、見失ってしまいました。

「これがなかったら、あのオルゴールを鳴らすことができん。どんなに困るだろう。」と、おじいさんは独り言をいってしまいました。しばらく、おじいさんは、港に立って、二人が気づいて、もどつてきはしないかと待っていました。ついに、二人はやってこ

なかつたので、おじいさんは、この古い鍵を海の中へ投げ入れて、
いずこともなく去つてしまいました。

父親は、汽船に帰つてから、はじめて鍵を忘れてきたことを
悟りました。しかし、どうすることもできませんでした。二人は、
また、それから航海をつづけました。

北の方の海に、まわつてきましたときに、父親は、港に上が
つて、近くの町へまいりました。そして、ある時計屋へいつて、
そのオルゴールに合う、鍵を探したのであります。ちようど、そ
れに合う鍵を見つけました。

船にもどつてから、二人は、そのオルゴールを鳴らすことがで
きたのです。

おじいさんは、鳥の唄だといいましたが、まことに、その音は
悲しいような、楽しいような、さまざまな心持ちを呼び起こす
ものでした。

このとき、どこからともなく、あまつばめが、群れをなして飛
んできました。そして、船のまわりでしきりに鳴き騒ぎました。

あまつばめは、めつたに、こうして騒ぐものではありません。

オルゴールの音をきいて、どこから飛んできたのでありましょう。
すると、たちまち、天気が変わってまいりました。

いままで輝いていた太陽は、隠れてしまい、ものすごい雲が
わいて、海の上は、怖ろしい暴風となつて、濤は狂つたのであ
ります。ほんとうに、どうしたことか、その中をあまつばめは、

船ふねのまわりに、岩角いわかどに、集あつまつてしきりに鳴ないていました。

とうとうその夜よのことです。大波おおなみが襲おそつてきて、船ふねの上うえのもの

のいつさいを洗あらいさらつてゆきました。そして、このとき、父ちちお

親やの大事だいじにしておいた、鉄てつで造つくられた金箱かねばこが転ころがって、海うみの

底そこ深く沈しずんでしまったのであります。そればかりでなく、小ちいさな

汽船きせんは、砂浜すなはまの上うえへ、打うち上あげられてしまいました。

夜よが明あけて、海うみの上うえが静しずまると、もう小ちいさな汽船きせんは、土つちの中なかに、

半はん分ぶんほどどうずまつて、海かい岸がんに建たてられた小舎こやのようにしか見み

られませんでした。

「ああ、もうこの船ふねの寿じゆみ命ようも尽つきた。私わたしも、航こう海かいをやめよ

う。」と、父親ちちおやはいいました。

子供は、はじめで、自分の希望がかなって、陸の上の生活ができるかと思いましたが、さて、自分は、野原へか、街へか、どちらへいつて、働いたらいいかと考えたのです。このとき、父親は、子供に向かって、

「私は、おまえに、たくさんな宝を残してやりたいと思つたのが、みんな、いまは、金箱といつしよに海の底に沈んでしまった。もうおまえにやるものがない。ただオルゴール一つだけだ。これをおまえにやるから……。」といたしました。

「いいえ、お父さん、私は、なにもいりません。あなたが、海の上でお働きになったように、私はこれから広々とした陸の上で働きます。けれど、私の仕事はけつして、最後に、あの鉄の中の

宝たからのように、形かたちもなく、むだとなつてしまふことは、ないである
 うと信しんじます。」
 子供こどもは、働はたらくべく、出でかけてゆきました。

あとに独ひとり父ちち親おやは残のこされました。海うみ辺べに横よこたわつた船ふねは、古ふる
 く朽くちてしまいました。煙えん突とつから煙けむりの上あがる曇くもつた日ひに、オル
 ゴールが鳴なつています。そして、その船ふねのまわりに、あまつばめ
 の飛とんでいる、寂さびしい景けしき色がながめられたのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 4」講談社

1977（昭和52）年2月10日第1刷発行

1977（昭和52）年C第2刷発行

初出：「赤い鳥」

1924（大正13）年9月

※表題は底本では、「汽船《きせん》の中《なか》の父《ちち》と子《い》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：館野浩美

2017年8月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

汽船の中の父と子

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>